

女性画家エレオノール・エスカリエの制作活動とその自己表象
—19 世紀後半のフランスにおける産業芸術振興運動の観点から—

志水圭歩 (お茶の水女子大学)

本発表では、19 世紀後半のフランスにおいて活動した女性画家エレオノール・エスカリエ (1827-1888) が、1863 年のサロンに出品した《自画像》(セーヴル陶磁都市所蔵) を取り上げ、産業芸術振興の機運の高まりと、当時女性芸術家が置かれた状況の中で、この自画像がどのような意味を持ったのかを考察する。

本作では、私室のような空間で、エスカリエが優雅に花瓶に筆で絵付けする姿が描かれる。従来の研究では、本作は、エスカリエが絵画のみならず陶磁器制作にも従事していたことを示すために引き合いに出されてきたに過ぎなかった。そこでは、なぜ画家のエスカリエが、芸術ヒエラルキーではより「格下」となる、花瓶に絵付けする姿で自分を描き出したのか、なぜルネサンス以来芸術家が獲得してきた、高貴な創造行為に従事する芸術家観にあたかも逆行するような形で、絵画等の「高級」芸術が重きを成すサロンに出品したのか、そうした点を読み解く視点が欠如している。

本発表では、こうした問題意識を出発点に、女性画家が置かれていた状況、エスカリエの制作活動、手仕事への関心、当時のフランスにおいて喫緊の課題とされた産業芸術振興の必要性等、様々な視点から、エスカリエの書簡、サロン評や産業芸術振興のための展覧会カタログ等を用いて本作を分析し、1863 年という時代の文脈における本作の新たな解釈を提示するとともに、当時の女性芸術家を取り巻く諸相の一端を明らかにする。

当時の女性芸術家が置かれた状況に鑑みれば、本作は、女性であるエスカリエが、私的な空間で余技として陶磁器に絵付けする、女性の「分」を弁えた姿をもって、当時の社会が求める女性像に親和的な演出を行おうとした、と考察し得るだろう。しかしながら本作には、余技に見合わない、エスカリエが本格的に陶磁器制作に取り組む状況を示す要素や、人物像を描くというデッサン能力の高さも同時に示されている。芸術家が、画家としての高い図案作成能力によって高みから産業に助力することは、当時の産業芸術振興を推進する言説や実践の中で既に実現されていた。しかし本作では、自画像を通じて画家としての高い技量を示す芸術家自身が、陶磁器の絵付けという職人的な手仕事の実践に従事する姿を示すことで、芸術と産業の対等かつ真の融合を目指す姿勢が提示されている。

一見、偉大な創造行為に従事する芸術家観に矛盾するよう見える姿勢をあえてサロンで表明した本作を、当時の産業芸術振興の動き等、様々な同時代文脈を踏まえて捉え直すことによって、本作が、この時代だからこそ描き出された、ひとつの女性芸術家の自己表象であったことを解き明かしてゆきたい。